

環境配慮的・倫理的意義を持つ移動手段としての 鉄道に関する研究

【2021年度 KR-086】

立命館大学 産業社会学部 現代社会専攻
准教授 富永 京子

1. 調査研究の背景

環境配慮商品やフェアトレード製品の購入など「倫理的消費」と言われる社会貢献が近年数多く見られ、近年、交通・移動の領域にまで影響を与えている。スウェーデンの環境活動家、グレタ・トゥーンベリ氏が環境に配慮して飛行機を使わず、鉄道やヨットを利用して国際会議の会場へと向かったことは記憶に新しい。こうした移動は海外のセレブリティなどにも共有されつつある（The Guardian, 2019.11.13, Gössling 2019 など）。

本研究では、高い環境配慮・倫理的消費意識を持つ人々による鉄道の旅がどのように普及し、また彼ら自身の意識にどのような影響を与えるのかを明らかにすることにより、社会的意義を持つ交通手段としての鉄道について論じる。

2. 調査研究の概要

本研究は、日本で環境配慮や社会的貢献活動を行う人々のうち、過去5年以内に環境に配慮したという理由で鉄道での旅を選定した人々に聞き取り調査を行うと同時に、補足的に彼らの旅行録を用いた。具体的には、環境配慮的な動機から特定の移動手段（フェリー、鉄道、自転車、カーシェア等）を選ぶ人を対象に研究した。これまでの調査の結果、彼らは環境への負担、利便性、移動コスト（時間、費用）を勘案した上で移動手段を選ぶものの、旅の過程で環境配慮に限らない、その交通手段ならではの社会的意義（見知らぬ他者とのコミュニケーションなど）を見出すことが判明したため、本研究では特に多くの人に好まれる「鉄道の旅」を対象とし、彼らが鉄道での移動に込めた社会的意義を明らかにした。

本研究では26名の協力者（中には過去にご協力頂き、繰り返し聞き取りを行った者もいる）に対して聞き取りを行い、ルポルタージュやエッセイ計38冊を通じて、社会的動機から移動手段を選ぶ人々の語りを分析した。うち、ZINEは25冊、ほかは商業流通されている書籍・雑誌である。補足的にオンライン上のブログやSNSにおける記述を用いたが、公開範囲や再編集などの可能性があるためあくまで補足的利用にとどめている。

「移動」に関わる社会運動研究を主たる分析枠組みとしてデータを検討した結果、以下が明らかになった。

- (1) 日本においても環境配慮的な動機から移動手段を選ぶ人はいるが、彼らの鉄道での移動において、環境配慮的な視点は必ずしも高くない。先行研究（Becken, Friedl, Stantic, Connolly and Chen 2021）は、「flightshame（フライトシェイム）」という概念とともに飛行機での移動忌避を論じている。この多くの研究の対象は欧州であり、日本でも同様の理由から鉄道での社会運動を選好するものが多いと仮定して調査研究を行ったが、必ずしも日本ではそうではなかった。
- (2) 鉄道が使われるのは、環境配慮や他の政治・社会的意図というよりもむしろ目的地に至るまでの経路の利便性といった、インフラ面での理由が大きい。だからこそ鉄道に見られる利便性が高くなければ、たとえ環境配慮の意識が高くとも利用を避けることは十分考えられる。例えば目的地への電車が一時間に一本程度しかないといった場合は、環境に与える影響を度外視しても自家用車などを使うことは十分に考えられる。一方、例えばイベントの企画者側が鉄道での移動を高く評価し、鉄道での移動が比較的容

易な場所で環境配慮や社会貢献に関するイベントを行うことは少なくないようだ。

- (3) また、ジェンダーの視点から検討すると、他者の運転する自家用車での移動（ヒッチハイクや相乗りなど）に恐怖感や不安感を持つ、あるいは実際に性被害の経験を受けたため、電車での移動を選択するという女性や性的マイノリティの人々も見られた。この点は先行研究などでも論じられることは少なく、今後さらなる検討課題と言える。
- (4) Activist Identity 論の観点から見ると、特定の移動手段を移動に使うユーザーほど、その交通手段の政治的貢献や社会的貢献としての要素を強調して認識するさまが捉えられる。これは社会運動で言うところの tactical identity（手段に対するアイデンティティ）（Polletta and Jasper 2001）の高揚とも言えるが、観光研究の視点からは能登路（1990）や岡本（2012, 2015）に見られるような巡礼とアイデンティティの連関とも考えられるだろう。
- (5) 一方で、とりわけ特急電車や新幹線といった高速で移動できる手段は、たとえ長距離だとしても「贅沢」であるという理由から避けられるか、拒否されやすい一面もある。このような、移動と消費、あるいは快楽の関係性に関しては、主に飛行機移動の観点から論じられていたが（Young, Markham, Reis and Higham 2015）、環境配慮や社会的貢献活動に従事する人々は資本主義への忌避感も強いため、新幹線や特急電車はまた異なる理由で忌避されやすいと考えられる。一方で、普通列車での移動は基本的には長距離であれ歓迎されると解釈できる。
- 以下の知見をまとめると、下図のような形となる。

特に欧州と比較すると、日本においては環境配慮という文脈はあまり強くない点が非常に興味深い。むしろ安全性や利便性といった観点から鉄道が選好されやすいという知見は重要であり、欧州と日本との社会的背景、社会における鉄道のあり方を踏まえて比較検討する必要がある。

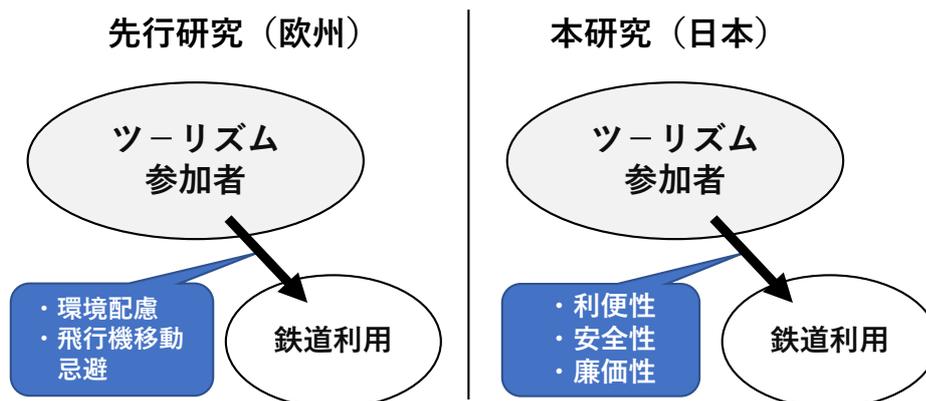
3. 調査を終えて

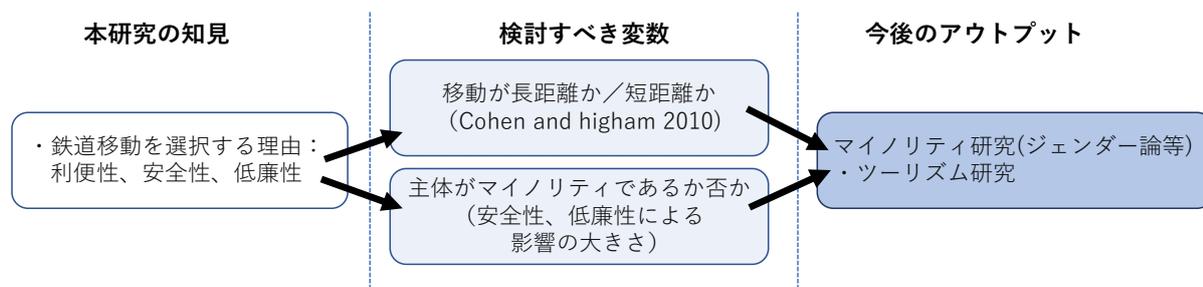
欧州において、主に飛行機忌避という観点からここ二、三年で多くの研究が行われてきた「社会的貢献 / 環境配慮と鉄道」という分野であるが、日本においては環境配慮という文脈はあまり強くない点が非常に興味深かった。むしろ安全性や利便性といった観点から鉄道が選好されやすいという知見は報告者の考えもよらなかった点であり、この点は先行研究が多く見られる欧州との比較によって再度検討する余地は十分にあるだろう。

鉄道旅行を選好する理由として、本調査で見られた変数としては「環境配慮」に加え「利便性」「低廉性」「安全性」があり、さらにこれらの変数は鉄道での移動頻度が高くなればなるほど一種の手法への思い入れ（Tactical Identity）として強まっていくことが明らかになった。

今後の課題であるが、欧州とのインフラ面での比較を行うとともに、他の変数によって本研究で検討したようなパラメータがどのように変動するのかを、例えば移動が長距離であるか短距離であるか（Cohen and Higham 2010）などによって観光学の研究を踏まえながら再度検討していく必要があるだろう。

最後に、今後の研究可能性を図（次頁）にて示したい。最終的には、ツーリズム研究のみならずマイノリティ研究などにも貢献できればと考えている。





謝辞等

本調査研究を行うに当たり研友社、江頭ホスピタリティ財団の支援を得た。□

参考文献・引用文献等

- 1) Gössling, Stefan (2019) : "Celebrities, air travel, and social norms" *Annals of Tourism Research* 79.
- 2) Becken, Friedl, Stantic, Connolly and Chen (2021) : "Climate crisis and flying: social media analysis traces the rise of "flightshame" , *Journal of Sustainable Tourism*, 29: 1450-1469.
- 3) Polletta, Francesca and Jasper, James (2001) : "Collective Identity and Social Movements." *Annual Review of Sociology* 27: 283-305.
- 4) 岡本亮輔 (2012) : 『聖地と祈りの宗教社会学 巡礼ツーリズムが生み出す共同性』 春風社
- 5) 岡本亮輔 (2015) : 『聖地巡礼 世界遺産からアニメの舞台まで』 中公新書
- 6) 能登路雅子 (1990) : 『ディズニーランドという聖地』 岩波新書
- 7) Young, Martin, Markham, Francis, Reis, Arianne C. and Higham, James E. S. (2015) : "Flights of fantasy: A reformulation of the flyers' dilemma", *Annals of Tourism Research* 54: 1-15.
- 8) Cohen, Allen, Higham, James E. S. (2011) : "Eyes wide shut? UK consumer perceptions on aviation climate impacts and travel decisions to New Zealand", *Current Issues in Tourism* 14, 323-335.